

# Voiceえひめ

## “聖地”を訪ねて ㊦

八股榎大明神。作業前には「剪定(せんてい)奉告祭」が催された。

「さっぱりするから我慢してなあ」と白装束の信者。作業員は硬い表情で黙々と作業を続ける。昭和初期、この榎を切った作業員はたたりで遭い亡くなったと伝えられている。

◇ 多くのタヌキ伝説が残る松山市だが、ここでは決して昔話ではない。11月8日の年大祭の日には、朝から続々と人が詰めかけた。

◇ 松山市の女性(88)は転職を考えていた2年前、この場所を知った。

8月、松山城の堀の一角で、国道に張り出した巨木の枝が切り払われた。伝説の「お袖狸」がすむという

# 世間話やがて信仰呼ぶ

## おたぬきさん

の像。そつえば、古里の庭にもタヌキがよく遊びに来ていたな、と縁を感じた。希望の会社に転職がかない、今もお礼参りを続ける。「階段を下りると、がらりと雰囲気が変わる。ほっとします」

「ずっと通り過ぎるだけだったんですよ」と語るのは自営業清水俊一(61) 松山市湊町6丁目。昔、榎を切ったたられたという人は遠縁。「いや死んではいない。ただ、病気を患ったとは聞いています」。小さいころ聞かされていた話に加え、うっそうとした木立がどこか恐ろしく、立ち寄りたことはなかった。

お堂の世話を続ける田中喜子(88) 同市安城寺町 掛けたのか覚えていない。

鳥居をくぐればそこは別天地。のんびりと時間が流れる 11月8日、松山市堀之内



に出会ったのは3年ほど前。導かっていた山岡亮(72) 同市新前。そうとは知らず、市役所の地下駐車場で声を掛けられた。田中から信仰や松山の昔話について聞くのが楽し

た。「なぜ用もないのに話したのか覚えていない。野球部の監督が甲子園で優勝して鳥居を新調した」「市長がおたぬきさんへの就任あいさつを怠って病気になる」「柔道の全大会で優勝した選手が願を掛けた」。あの人が化か

「信心の元も世間話からでしょ」。2年前まで月に1回、タヌキ好きが集う「いよ狸サロン」を主宰された。こんな不思議がある。世間話がやがて伝承となり、熱心な信心を呼ぶ。昭和初期にも「松山愛甲会」(申は「田を抜く」から)があった。川柳の前田伍健、俳句の富田狸通ら文化人がタヌキ話を収集した。「松山は俳句の街。集まってわいわいやるのが好きなんです」と山岡。

(文中敬称略、清原浩之)